

「のいちご」6月号が6月2日に我が家の郵便受けに入っていました。7月、8月の山行き予定はどうか、楽しみに開封したところ巻頭言のお願いと赤い字で書かれた1葉が出てきて驚き、これは困った。これまで頂いた「のいちご」の巻頭言は全て山との係わり合いが主題になっていましたので、伊豆ハイクに参加するまで山と無関係に生きてきた小生には書く材料がない。どうしよう、断ろうか。断れば山に関係ないことでもかまいませんと言われることは必定。約1週間悩みに悩んで「何で山に登るか」を考えて書いてみることにしました。

何故山に登るか問いには「そこに山があるから」の答えをずぶの素人の小生でも知っています。本当にそうだろうか。山がなければ登れないのは確かですが、山に登ることがこんな表層的なこととは思われません。目的地を往復するバスの中で皆さんが話されるのが山のことばかりで、最初は伊豆ハイクに入ったことが間違えであったような気さえしました。でも会員の皆さんは本当に山が好き、好きで好きでたまらない と言うことが漸く分かってきました。もしかしたらメシよりも、異性よりも好きかも知れない。中には山小屋の姉さんが好きな方もいるようですが。こんな好きなことを「そこに山があるから」で片付けて良いか、良いはずがない。それとも頂上で食べる握り飯の美味さ、山に登ってこそその眺望・絶景、かわいい花を付けた高山植物との出会い等々、数知れない山登りの楽しさを体感するためでしょうか。でも、そのためだけに時間を割き、大枚をはたき、身の危険をさらすでしょうか。もっと内面的なものがあるはず。直ぐに浮かんでくるのが達成感であろう。目的や目標を達成したときに得られる快感は何事にも替えられない。山は目標になり易いし、登山中の苦しさは頂上を制覇した時の達成感を高めるに十分である。しかし、それだけでは片付かない感じがする。バスの中で皆さんの輝いている顔はより深い充実感を物語っているように思えてならない。そこで思い出されるのはマズローの欲求段階説であり、山登りは欲求5段階の最高位である自己実現の欲求を満たしているのではないか。山登りで自己を表現している。そこには深い満足感があるように思われる。毎日の生活の中で自己実現の欲求を満足させることは至難であるが、登山は格好の自己実現の場となり得る。しかし、その場は時間的にも場所的にも限定的であるという特徴があるように思える。そのため、一回その満足を経験すると次から次へと登りたくなるし、より難度の高い山に挑戦したくなるのではないか。その情報交換がバスの中で盛り上がっているのではないのでしょうか。上記は本格的な山に登ったことのない素人が感じている「何故山に登るか」に対する考察である。

実際には、多くの登山愛好者はもっと気軽に山に登っているのではない。山道の一步一步に人それぞれの思いを乗せて、自然と対話し、互いの健闘をたたえ合っている、生活の一場面であろう。小生も足腰を鍛えて、今後とも可能な限り山登りに参加させて頂き、残りの人生を楽しみたいと思います。